

『古事記』『日本書紀』が奏上された平城京

稗田阿礼の読む『帝紀』『旧辞』*
を太安万侶が編纂したとされる。
『日本書紀』は神代から持統天皇
までの歴史を編年体で記した日本
初の勅撰正史。天武天皇の命によ
り舎人親王らにより国家事業とし

山の辺の道には記紀・万葉ゆかりの地名や伝説が残る
出典：奈良県景観資産

記紀編纂が始まった飛鳥京跡

て編纂された歴史書だ。2つの歴
史書を合わせて記紀という。
『万葉集』は現存する日本最古
の歌集で、天皇、貴族から兵士や
農民などさまざまな身分の人が詠
んだ歌が幅広く選ばれている。約

4500首のうち約900首に
奈良の地名が詠み込まれており、
大伴家持の編纂とされる。最近で
は令和の元号出典元として関心を
集めた。記紀・万葉集はいずれも
奈良時代に完成したとされるわが

本物の古代を体感する 「記紀・万葉プロジェクト」

1300年前の奈良で誕生した『古事記』『日本書紀』『万葉集』。

奈良県は2012年からこれらの歴史素材を活用した「記紀・万葉プロジェクト」を進めてきた。

継続的な取り組みによって奈良の魅力を再発見し、観光・地域振興につなげようとするもので、

20年に節目を迎える。これまでの取り組みと今後の展望について

奈良県記紀万葉プロジェクト推進係の中川裕介さん、中村明佑美さんに聞いた。

平城遷都に続く「記紀・万葉」

「記紀・万葉プロジェクト」は、『古事記』完成1300年を迎えた2012年から20年の『日本書紀』完成1300年までをつなぐ9年間のプロジェクト。奈良県にゆかりのある記紀・万葉集をはじめ地域の伝承を含む豊かな歴史素材を活用したさまざまな施策を展開している。

背景には2010年に開催した平城遷都1300年祭の盛況によってもたらされた奈良への関心を持續させ、県の存在感をアピールしたい思いがある。奈良の魅力を発信することで観光客の誘致や地域振興を図るとともに、奈良のブランドイメージを強化しようという考えだ。そこで白羽の矢が立ったのが記紀・万葉集である。

『古事記』は神話や国の成り立ちにまつわる出来事を物語調で記した日本最古の歴史書。

国有数の文献である。誰もが知る3つの名高い歴史素材を使わない手はない。

「大古事記展」に10万人来場

「取り組みにあたっては、日本の国家の始まりである奈良を身近に感じてもらい、『本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良』を実現するための方法を考えました」と中村さん。記紀・万葉集に興味を持つコアなファンには知識を深掘りする講演会を、あまり興味のない層には、かるたやすごろくなどのツールや文献とスポット



法華寺は平城京遷都を推進した藤原不比等の邸宅跡とされる

*『帝紀』『旧辞』は、『古事記』『日本書紀』以前に存在したとされる歴史書

を結びつけたイベントなどで歴史素材に親しめる工夫をしてきた。14年に奈良県立美術館で開催した「大古事記展」には、『古事記』を題材にした絵画をはじめ、国宝・七支刀など古社に伝わる宝物、多彩な考古・文献資料、現代アーティストが古事記にインスピレーションを得た新作などバラエティ豊かな展示物を集めた。「五感で味わう、愛と創造の物語」と題し、古代から未来へと語り継ぐ古事記ワールドを創出し、10万人を超える来館者で賑わった。

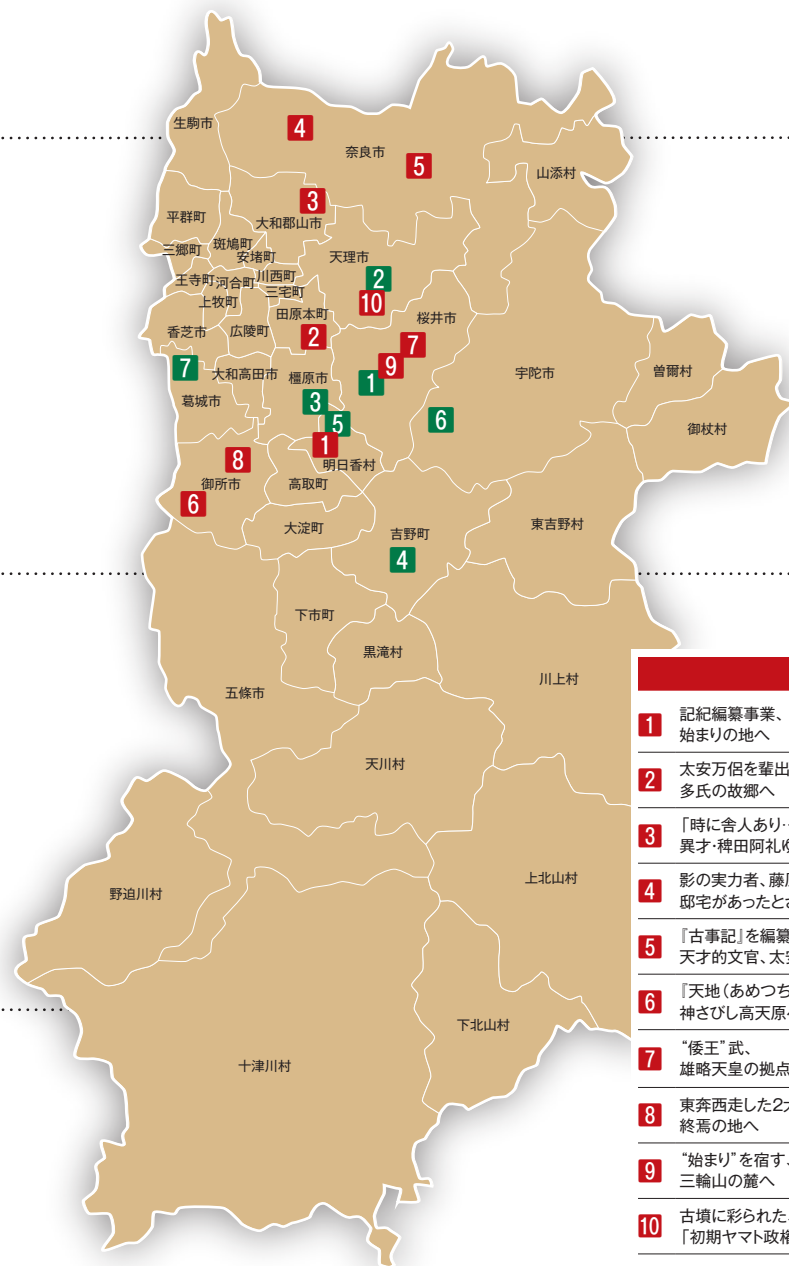
記紀・万葉でたどる奈良

記紀	万葉
1 記紀編纂事業、始まりの地へ	1 大和国原を見はるかす、神話の道へ
2 太安万侶を輩出した多氏の故郷へ	2 初期王朝を偲ぶ、巨大古墳の道へ
3 「時に舍人あり…」異才・稗田阿礼ゆかりの地へ	3 大和三山に見守られし、藤原京へ
4 影の実力者、藤原不比等の邸宅があったとされる地へ	4 白泡の玉と響く、美しき清流・宮滝へ
5 『古事記』を編纂した天才的文官、太安万侶の墓へ	5 古代の記憶が眠る、飛鳥の里へ
6 『天地（あめつち）のはじめ』神さびし高天原へ	6 かざろひ立つ古の狩猟地、阿騎野へ
7 “倭王”武、雄略天皇の拠点へ	7 悲劇の皇子を悼む、二上山の頂へ
8 東奔西走した2大ヒーロー終焉の地へ	
9 “始まり”を宿す、三輪山の麓へ	
10 古墳に彩られた、「初期ヤマト政権」誕生の地へ	



©NARA pref.
奈せ第19-105号

その後も、毎年継続して記紀・万葉を語る講演会を多くの市町村で開催。ゆかりの地をめぐる観光ガイドの作成や散策イベントなどを通じて、記紀・万葉を体感する場を提供し、観光客へのアピールや地元の活性化につなげている。子供向けには、『古事記』の名場面を集めた「古事記かるた」や『日本書紀』の有名テーマをもとにした「日本書紀すごろく」などを使って歴史素材に触れ、遊びな



『古事記』『日本書紀』にも描かれた大神神社

がら学ぶ機会を提供している。また、プロジェクトの一環として民間が主体となって実施する歴史文化資源普及啓発活動に対し文

化資源活用補助金による支援も行っている。19年度は記紀・万葉関連のイベントを中心に16件を採択。斑鳩町では伝統芸能・雅楽をテ

マに、雅楽の成り立ちを紹介する講演や雅楽演奏が披露された。これまで行政主導で進めてきた活動が民間に根づきつつある。

9年間の集大成に向けて

9年間にわたる「記紀・万葉プロジェクト」は20年に節目を迎える。集大成に向けて、この1月13日に奈良春日野国際フォーラムで「日本書紀完成・藤原不比等没後1300年記念イヤーオープニングイベント」を実施。パネルディスカッションや能の公演を行った。続いて15日から東京国立博物館で「日本書紀成立1300年特別展『出雲と大和』」を開催した。奈良県と島根県の連携により日本書紀にまつわる国宝・文化財約170件を展示、雅楽と石見神楽の記念公演を行った。これを皮切りに20年はシンポジウムや講演会、イベントを実施していく計画だ。奈良県は50年、100年という長期的な視点に立ち、記紀・万葉集に代表される歴史素材を現代の感覚でひもとき、親しみ、楽しみ、味わうことで先人によって受け継がれてきた豊かな歴史を知り、未来へと引き継いでいく心を育むことをめざしている。21年に聖徳太

子没後1400年を迎えるにあたり、「記紀・万葉プロジェクト」の後継事業として聖徳太子を中心としたプロジェクトが並行して進められている。

歴史に興味を持つ層を広げる

プロジェクトの成果を観光客数の増加など目に見える形でとらえるのは難しいが、県民へのアンケート調査では、奈良県は文化遺産や史跡が大事にされていると感じると答える人が多く、満足度は高いという。「講演会の参加者募集には定員の倍以上の申し込みがあり、『記紀・万葉プロジェクト』を身近に感じてもらっているとみています。ただ、参加者は歴史に興味を持つシニア層が多く、ファミリー層や子供たちの参加を増やしていくのが課題です。今後も継続的に奈良の魅力を発信し、歴史文化に親しむ人の裾野を広げていきたい」と中川さんは話す。

大陸や朝鮮半島とつながり、仏教を採り入れた先進地でもあった奈良は、日本のルーツを体感できる唯一無二の地。歴史文化を生かす取り組みに今後も目が離せない。

